

概要

- 自然生態系の町づくりに取り組んできた綾町では、近年のオーガニック需要の高まりに対応できる契約産地づくりが課題となっている。
- 綾町に移住してくる若者等は、田舎暮らしや消費者の顔が見える経営を希望する者が多く、結果として経営が成り立たずに営農を断念し、数年で町を去って行く状況が続いている。
- そこで、国のオーガニックビレッジ事業を活用し、綾町で有機農業での業務用野菜の経営を体系的に学ぶ「綾オーガニックスクール」(校長は綾町長)を令和5年6月に設立し、有志4人の有機農業者で設立した(合)アヤオーガニックワークスが学校運営を行う体制を整備した。

具体的な成果

1. 有機農業を志す新規就農者の確保(定員3名) 令和5年度(1期生)1名、令和6年度(2期生)3名

2. 実習・就農用農地の確保 役場所有農地 0.5ha、耕作放棄地3ha
※2年間の研修後に50a/人の有機JAS農地を提供

3. 研修体制の整備

- ・運営主体 合同会社アヤオーガニックワークスの設立
- ・実習担当職員(2名)、天敵、土づくりの専任講師(各1名)の確保
- ・有機JAS用の育苗ハウス、作業舎、ネギ播種機・葉切り機・定植機の整備



綾オーガニックスクール開校式

普及指導員の活動

令和3年度

- 綾町役場で、天敵、土づくりの専任講師による「有機農業を科学する研修会」を開催

令和4年度

- オーガニックビレッジ事業(国)を推進するため、綾町有機農業推進計画の策定指導を行うとともに、スクールのプレ講座として天敵・土づくり講座(各5回)、有機農業栽培技術の動画編集、新しい有機JAS資材の実証等に取り組んだ。

令和5年度

- (合)アヤオーガニックワークスの定款作成から登記までを指導。
- 綾オーガニックスクールの管理運営要領、シラバス、外部講師の確保等を指導・支援。
- 耕作放棄地を有機JASほ場として再生する作付け体系の検証、有機JAS苗の安定生産技術の検証

令和6年度

- スクールの管理運営にかかる企画・指導
- 有機JASでの稲作及びねぎ生産技術の検証



綾オーガニックスクール・プレ講座募集



土づくり講座の様子

普及指導員だからできたこと

- ・先進的な有機農業を展開する(合)アヤオーガニックワークスの栽培技術の更なる高度化・平準化に向けた指導を通じて、スクールの具体的な教育内容を整理できた。
- ・耕作放棄地の再生や町民を対象とした公開講座等を通じて、スクールの意義を広く認識していただけた。

有機農業産地拡大のための新規就農支援体制の構築

活動期間：令和3年度～(継続中)

1. 取組の背景

自然生態系の町づくりに取り組んできた綾町では、近年のオーガニック需要の高まりに対応できる契約産地づくりが課題となっている。

綾町での新規就農を希望し移住してくる

若者等は、田舎暮らしや消費者の顔が見える少量多品目経営を希望する者が多く、結果として経営が成り立たずに営農を断念し、数年で町を去って行く状況が続いていた。

このような中で、令和3年度に綾町の4名の有機農業法人等より、営農を断念し町を去って行く移住者を無くしたいので、有機農業をしっかりと学べる学校を作りたいとの相談が普及センターに寄せられた。

このため、普及センターが外部リーダーとなり役場も交えて検討を重ねた結果、役場やJAで構成する「綾町自然生態系農業推進会議」が設立母体となって有機農業を学ぶ学校を設立することとされた。

■綾町の新規就農者の推移

区分	H24	H30	H31	R2	R3	R4
後継者	2	0	1	1	4	2
新規参入者	5	2	3	2	4	3
法人就農	10	6	8	13	11	8
合 計	17	8	12	16	19	13

2. 活動内容(詳細)

① 有機農業を学ぶ学校設立の理解醸成（令和3年度）

昭和49年(1974年)に「綾町自然を守る条例」を制定し、土づくりや資源循環型の町づくりに取り組んできた綾町であっても、現在の農業の柱は慣行栽培の促成キュウリや畜産である。

綾町憲章

1. 自然生態系を生かし育てる町にしよう
1. 健康で豊かな活力ある町にしよう
1. 青少年に誇りと希望をいだかせる町にしよう
1. 生活文化に創意と工夫をこらす町にしよう
1. 思いやりとふれあいで明るい町にしよう

このため、役場が有機農業に特化した学校を 設立する意義を浸透させるため、普及センター主催で公開講座「有機農業を科学する研修会」を2回(天敵編・土づくり編)開催。

令和3年5月に「みどりの食料システム戦略」が発表されたこともあり、研修室(40名)が満員になる関心の高さで、有機農業の学びに対する手応えを感じる研修となった。

② オーガニックビレッジ事業(有機農業産地づくり推進緊急対策事業：農林水産省)へのチャレンジ（令和4年度）

令和4年度「オーガニックビレッジ事業」に、綾町が採択されたことから、綾町等とともに「綾町有機農業推進計画」の作成にあたりとともに、有機農業を学ぶ学校のプレ 講座として天敵・土づくり講座(各5回)を開催した。

更に、有機農業での就農に関心のある方が綾町の有機農業を支える理論や、主要野菜の栽培技術をオンラインで学べる環境を整備するため、動画撮影・編集作業に着手した。



また、これまで農業者の経験や口コミで継承されてきた有機農業技術を、数値的に検証し有機農業技術の技術革新を図っていくため、土壌診断と併せて土壌断面調査を行い土壌の化学性、物理性、生物性について学ぶとともに、未利用地域資源の竹を発酵させた土壌改良資材「笹サイレージ((株)炊和フロンティア)」の効果を検証するレタス、ブロッコリーの展示ほを設置した結果、特にレタスにおいて顕著な生育促進効果が得られた。



土づくり専任講師による土壌診断調査

この成果により、有機農業者のみならず慣行栽培の促成キュウリ農家にも広く資材が普及した。

③ (合)アヤオーガニックワークスの設立

有機農業を学ぶ学校を自律的に運営していくために役場や4人の有機農業者との協議を重ねた結果、4名の農業者で学校運営の受け皿となる法人を新たに設立することになった。将来、法人成を目指す農業者もいたことから、法人形態について説明を行い、定款作成から出資、法人登記まで農業者自身で経験できるよう指導を行った。



運営主体「アヤオーガニックワークス」の設立

また、学校の形が見えない中で第1期生の募集活動を行うために、役場とワークスの職員が東京、大阪、県内での移住セミナーに参加し、学校のPRを行うとともに、具体化に向けた検討を重ねた。

④ 綾オーガニックスクールの開校（令和5年度）

令和5年6月10日に1期生1名を迎え、校長である綾町長の下、農林水産省政務官をはじめとする来賓を招いて開校式が行われた。



開校に先立ち県立農業大学校の管理運営要領やシラバスを参考にスクールの活動内容を文書で規定するとともに、中部農業改良普及センターでの新規就農者研修(全9回)への参加やスクール独自の外部講師による講座の企画等に取り組んだ。



綾オーガニックスクール開校式

⑤ 綾オーガニックスクール専用農場・施設等の整備

ア 実習農地の確保

スクールは2年制学校であることから2年後には卒業生の就農地として有機JAS認証農地を確保する必要がある。

有機JAS制度では耕作放棄地を再生した農地は移行期間が1年に短縮されることから、耕作放棄地をスクール実習農地として確保し再生していくことで、実習農地と学生の就農予定地を確保していく仕組みとした。

令和6年6月現在3haの実習農地を確保している。



5年以上耕作放棄されていた水田(before)



緑肥栽培の後にジャガイモを作付け(after)

イ 有機JAS育苗施設の確保

苗半作と言われるが、有機農業では特に健苗育苗技術の差が大きくでること、定植機械によって育苗方法が変わることから、育苗は学生が習得しなければならない必須技術の一つである。

このため県の「みやざき有機農業拡大加速化事業」を活用し、町所有の園芸用ハウスをスクールの有機JAS苗専用育苗ハウスとして改修整備を行うことで、スクール生のみならず、



有機JAS育苗施設の整備

綾町の有機農業者が必要とする苗を生産する体制を整備した。

その他にスクールの農場で生産した作物の出荷 調整を行う作業舎や、機械利用組合で利用頻度の少ないトラクター等の活用など、実習体制の整備に取り組んだ。

⑥ 2期生を迎えて（令和6年度）

令和6年4月2日に2期生3名を迎え入学式を行った。今年度から綾オーガニックスクールの学生は地域おこし協力隊として受入れを行うこととされ、その事務を綾町からアヤオーガニックワークスが受託することとされた。

この結果、学生には年間280万円の給与と200万円の活動費が支給される。

初年度は手探りで綾町の有機栽培で普及している葉菜類（レタス等）や根菜類（にんじん等）を中心に実習を行ってきたが、2年目は稲作や果菜類（なす・オクラ等）、ねぎ等品目を拡大し、学びの幅を広げた。

また、綾町の有機栽培で課題となっていた、有機 JAS では使えないネギのチェーンポット栽培の代替技術として、セル苗育苗による栽培技術を提案し、県の「みやざき有機農業拡大加速化事業」を活用して、播種機、葉切り機、定植機を導入した。

これにより、7名の有機農家とスクールで2ha分のねぎの育苗をスクールの育苗施設で行い、定植はすべてスクール職員と学生(1期生)で行った。

今後、水稻のアイガモロボットや紙マルチ田植え機、ロボット除草機の実証や新しい資材等の開発・実証をスクールで行っていくことで、綾町の有機農業の技術革新やスマート化を加速させる。



水田に土壌改良資材を散布



3. 具体的な成果(詳細)

綾町の強みである有機農業による新規就農をサポートする綾オーガニックスクールを設立し、定員3名に対して1期生は1名であったが、2期生は3名と定員を充足した。また、管理運営規程やシラバスを作成した上で、座学の講師の確保や、実習品目の拡大、実習農地・施設等の整備などを進めてきた結果、就農希望者が安心して入学できる専門学校としての体を成すところまできた。

4. 農家等からの評価・コメント

(綾町・アヤオーガニックワークス代表 松井道生氏)

これまで綾町の自然生態系農業に夢を持って移住してきた若者達が、農業技術の基本

を身につける間もなく、数年で夢破れ、綾町を去る姿と見てきて、いつか何とかしたいと考えてきた。

綾オーガニックスクールは、みどりの食料システム戦略の発動という大きな有機農業の追い風の中で、県農業改良普及センターや綾町役場と連携することで立ち上げることができた。

これからは、スクールを核に、真に持続的な農法として自然生態系農業のレベルアップを図っていくことで、有機農業の担い手の育成だけでなく、オーガニックマーケットに本物の美味しい農産物を供給できる産地づくりに取り組んでいきたい。

5. 普及指導員のコメント

(中部農業改良普及センター・専門主幹・山本泰嗣／主査・邊見博子)

有機農業は栽培体系を支えている科学的な専門書がほとんど無いため、先進農家の篤農技術や植物生理や土づくり、天敵利用等の知見を紐解きながら、手探りで指導を行ってきた。

新しい課題が発生すると栽培暦に管理作業が増える足し算の慣行農法は、コストが嵩むばかりで限界にきていることから、有機農業で得られる知見を慣行農法に還元していくことで、新しい時代の農業技術のあり方を構築していきたい。

6 今後の展開・方針等

自然生態系や有機という言葉への憧れだけで入学を希望する者も多いことから、綾町の認定農業者として生計を立てていく業務用有機農産物の担い手を育成する学校としてまた、綾町の自然生態系農業の技術革新を推進する活動拠点として機能するよう指導・支援を行っていく。